

早稲田大学 高等学院
2023年度 一般入試小 論 文
(問題)

2023年度

〈R05176361〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の所定欄(1カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
 - (4) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答すること。
 - (5) 解答は縦書きとし、楷書で上から下へ書くこと。
 - (6) 題名(タイトル)は記入せず、解答用紙の一行目から本文を書き始めること。
 - (7) 解答用紙は表裏両面を使用する形になっている。表から使用すること。
 - (8) 下書きには問題冊子の余白を利用すること。
- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにするなど。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 この問題冊子は持ち帰ること。

次の文章の筆者は、奈良少年刑務所において受刑者を対象に、「物語の教室」の講師を務めた。「物語の教室」は、受講者の社会性を養うことを目的とするいくつかの授業の一端として行われ、この「物語の教室」では絵本と詩が用いられた。この文章は、その授業での筆者の体験を描いたものである。

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。なお、九〇一字以上一二〇〇字以内で述べることとし、改行によって生じる空欄は字数に数えるものとする。

というわけで、ようやく詩の授業にたどりつくことができた。ここまでの時間は、彼らにとって詩を書くための心の準備体操であり、わたしにとっては彼らを知るための準備期間だった。わたしは、受刑者たちのことをまるでわかってなかった。彼らの育った世界は、わたしが見てきた世界から、それほどかけ離れていたからだ。童謡の「ぞうさん」や「宿題」という言葉を知らない子が実際にいるなんて、わたしには想像ができなかった。わたしは、分断化された社会の上澄みで、きれいな水だけを飲んで、のうのうと過ごしてきたに違いない。彼らに出会うのは、新聞の記事やテレビのニュースだけ。背後にある悲しい物語を知らず、社会に表出した最悪の結果だけを見てきたのだ。そして、漠然と犯罪者を「恐い人々」だと思ひこんでいた。

けれど、実際に出会った彼らは違った。そのことをみんなにも知ってほしくて、二冊の『奈良少年刑務所詩集』を編纂したし、この本を書いている。

さて、いよいよ詩の授業だ。そのためには彼らに詩を書いてきてもらわなくてはならない。「詩」というと、だれだつてそれだけでハードルが高くなる。それはきつと「詩」が、神聖な、魂の言葉であるからだろう。そして、なにか美しいことやいいこと、独特の視点を持った気の利いた言葉を書かないといけないという先入観があるからかもしれない。まずはハードルを下げようと思った。

「みなさん、詩を書いてきてください」と言つと「えーっ」という声が起きる。

「大丈夫、むずかしく考えなくてくださいね。りっぱなことやいいことを書くことと思わなくても、いいんです。上手に書く必要ありません。なにを書いても構いません。たとえば、『きょうは暑かったな』なんて、たった一行書くだけでもいいんです。小さな頃の思い出、うれしかったことや悲しかったこと、将来の夢や希望、心配や不安を書いてくれても構いません。もちろん、いまの気持ちを書いてもらってもいいです。どんなことでも、刑務所への苦情や教官や刑務官の悪口でも構いません。なにを書いてきても、この教室では絶対に叱りません。懲罰にもなりませんから、安心してください。もし、どうしても書くことが見つからなかったら『好きな色』について書いてきてくださいね」

すると、さまざまな色の詩が提出された。一口に「犯罪者の心の闇」なんていうが、そんなことはない。それを、講師控え室で読んだとき、胸がいっぱいになってしまった。青、赤、黄、緑……うす紫、なんていうかわいらしい色を挙げた子もいる。そこには、さまざまな、それこそ虹の七色よりも多彩で繊細な色があふれていた。こんな色も。

金色

金色は

空にちりばめられた星

金色は

夜 つばさをひろげ はばたくツル

金色は

高くひびく 鈴の音

ぼくは金色が いちばん好きだ

無口で無骨な感じのするAくんの作品だ。金色といっても、目に見える色だけではなく、空を飛ぶ鶴のイメージや鈴の音色を「金色」と表現している。なんとみずみずしく豊かな感受性だろう。彼が、心のかにこんなにも美しく静謐なイメージを抱えているとは、想像もつかなかった。「詩」でなければ、表現できないことだったかもしれない。

次は、おとなしいBくんの作品。

銀色

無限にある色のなかで
ぼくは 銀色が気になってしょうがない
銀色には さまざまな姿が写る
人の姿や動き
物の形や大きさ
小さく写ったり
大きく写ったり
銀色は 見えぬ色でもあるけれど
見える色

子どもの頃、スプーンや魔法瓶に顔を映してみたときのことを思いだした。自分の顔が大きく歪むのが面白くて、近づけたり遠ざけたりして遊んだものだ。森羅万象の色彩を映しているはずなのに、鏡を「銀色」と感じるのも、考えてみれば不思議なことだ。

大人になることで、わたしはそんな思いをどこかに置いてきてしまった。けれど、Bくんは、いまでも子どものような驚きを持ち続けている。それが新鮮だった。なんとやわらかな心をしているのだろうか。けれども、もしかしたら、それゆえに彼は、この世界では生きにくかったのかもしれない。

「黒」を挙げる子も多かった。「男らしさ」の象徴だからだろう。Cくんの詩。

黒

ぼくは 黒が好きです
男っぽくて カッコイイ色だと思います
黒は ふしぎな色です
人に見つからない色
目に見えない 闇の色です
少し さみしい色だな と思いました
だけど
星空の黒はきれいで さみしくない色です

残酷な事件が起きると、人はすぐに「心の闇」と言う。理解不能なモンスターであるとして切り離し、社会から排除しようとする。しかし、その闇も、ただ一色に塗りつぶされた単調な黒ではないのだ。こんなにニュアンスに富んだ、豊穡な闇だ。

読んでいて、切なくなった。「人に見つからない」「闇の色」を、Cくんは「さみしい色」と感じている。人生のなかで、きっとそんな思いをしてきたのだろう。物かげに隠れて怯えているCくんの姿が透けて見えた。

けれどもCくんには、永遠の広がりを持つ星空を求める気持ちがある。「さみしくない色」と語ってくれたところで、救われた気持ちになった。

犯罪者とはいえ、「心の闇」は、こんなにも重層的な響きを抱いているのだ。

たった一行だけの詩から、みんなの心の扉がいつせいに開かれたことがあった。

くも

空が青いから白をえらんだのです

ひと目見て「なんと詩的な言葉だろうか」と思った。主語は省略され、タイトルがそれを示している。「空が青いから、わたしは白という色を選んで、空に浮かんでいるのです」という雲の一人称だ。

「Dくん、声を出して、読んでみてください」
すると彼は、下を向いたまま、ひどい早口でツラツラつと読んでしまった。不明瞭で、なにを言っているのかさっぱりわからない。

当時、Dくんには薬物中毒の後遺症があった。そのため、それらが回らない。頭には、父親から金属バットで殴られたという痛々しい傷跡があった。それも言語不明瞭の原因かもしれない。虐待され、親から否定され続け、自分に自信を持ってないから、いつも下を向いている。早口なのは、発言時間を少しでも短くしたいという思いからだろう。

「ごめんね、よく聞こえなかった。悪いけど、もう一度読んでくれないかな」

それでも、まだよく聞きとれない。短い詩なので、何回か読み直してもらった。

「ごめんね、向かいのお友だちに、よく聞こえるように、顔をあげて、ゆっくり読んでみてちょうだい」

そう言うのと、Dくんはようやく顔をあげ、やっと聞きとれるような言葉を発してくれた。

「空が…青いから…白を…えらんだのですっ」

息を詰めるようにして聞いていた仲間たちが、ほっとして、一斉に拍手を送った。わたしも教官たちも拍手をした。だれもが、うれしそうだった。おべんちゃらではない、心からの拍手だ。すると、Dくんが「せ、先生」と、遠慮がちに手を挙げた。

「あ、あの…：よく、話したいことがあるんです。話してもいいですか」

びっくりした。いつもうつむいたまま、ほとんど話さないのに、自分から話したいと言いだしたからだ。心の扉が開いた瞬間だった。

「どうぞ、どうぞ話してください」

すると、Dくんは話しはじめた。最初のひと言は、いまでも耳にはつきり残っている。

「ぼくのおかあさんは、今年で七回忌です」

胸がひやりとした。どもりながらつかえながらのDくんの話の要旨はこうだ。

「おかあさんは、体が弱かった。けれども、おとうさんはいつも、おかあさんを殴っていました。ぼくはまだ小さかったから、おかあさんを守ってあげることができませんでした。おかあさんは亡くなる前に、病院でぼくにこう言ってくれました。『つらくなったら、空を見てね。わたしはきつと、そこにいるから』。ぼくは、おかあさんのことを思っ、おかあさんの気持ちになっ、この詩を書きました」

胸がいつぱいになっ、涙を堪えるのがやつとだった。たった一行の詩の向こう側に、こんな物語があったなんて。

Dくんの言葉が、受講生たちの心の扉を開いた。自分から次々に手を挙げたのだ。

「ぼくは、Dくんは、この詩を書いただけで、親孝行やつたと思います」

なんてやさしい！ おかあさんをおとうさんの暴力から守ってあげられなかったことに罪の意識を持っているDくんに、「大丈夫だよ、親孝行できたよ、詩を書いただけで供養できたからね」と話しかけてくれているのだ。その彼が、実は殺人という重い罪で服役している。こんなやさしい気持ちを持っているのに、なぜそんなことをしてしまったのか。別の子が手を挙げた。

「Dくんのおかあさんは、きつと雲みたいになっ白で清らかな人なんだろうと思いました」

そんなすてきな想像力を持っているのに、なぜきみは犯罪なんかしてしまったの、どうなるか考えなかったの、と喉元までこみあげたが、ぐつと飲み込む。

「ぼくもです！ Dくんのおかあさんは、きつと雲みたいになっわらかくてふわふわで、やさしい人なんじゃないかなと思いました」

もう、どうもこいつも、なんてやさしいんだろう。一体、なにがあっ、きみたちはここにいるのだろうか、そんな問いが心のなかを駆け巡った。

すると、また一人、勢いよく手を挙げた。「Eくん、どうぞ」と指すが、なかなか声が出ない。背の高い子だった。それなのに、そう見えないのは、いつも背を丸めて縮こまっているからだ。ずつとうつむいたまま、暗い顔をしていた。まるで、そこだけ「闇のスポットライト」が当たっている、と思うほどの暗さだ。

「ぼ……ぼ、ぼくは……」と、声を出そうと必死でもがいている。彼の前に目に見えない大きな壁が立ちだかっているのがわかる。Eくんはその壁を必死でのぼっていた。しばらくして、ようやく絞りだすように、こう言った。

「ぼくは、おかあさんを知りませんっ。でも、ぼくもこの詩を読んで、空を見あげたら、おかあさんに会えるような気がしてきましたっ」

そして、わっと泣き崩れてしまった。教室のみんなが、口々に彼を慰めた。

「そうだったんだ」

「さみしかったんだね」

「がんばってきたんだね」

「ぼくもおかあさん、いないんだよ」

みんなの声を背に受けながら、Eくんはおいおい泣き続けた。教官たちも、もらい泣きをしていた。

この日を境に、Eくんは劇的に変わった。それまで、自傷行為が絶えなかったのに、それがびたりと止まったのだ。Eくんは、犯した罪の深さにおののき、自分には生きている価値がないと自殺未遂を繰り返してきた。そのたびに「懲罰」を受けて、独居房に隔離されてきた子だった。それが、おそらくはこの日生まれてはじめて「母のいないさみしさ」を公の場で告白できたのだろう。それをみんなに受けとめてもらった経験が、彼の心を癒やしたに違いない。

翌月の授業にやってきたEくんは見違えた。背がぐんと高くなっている。丸まっていた背中がピンと伸びてきたからだ。最後の授業では、笑顔さえ浮かべ、みんなと対話ができるようになっていた。

Eくんには、後日談がある。半年間の社会性^{社会性}涵養^{かんよう}プログラムが終了すると、わたしたち外部講師は、もう彼らに会うことはできない。しかし、Eくんとは一度だけ会う機会があった。テレビの取材が入り、Eくんがインタビューをされたのだ。

半年ぶりに見るEくんは、見違えるように明るくなっていた。背筋も伸びて、別人のようだ。彼は、胸を張ってこう語った。

「こんど、実習場で、副班長になったんですー」

みんなのお荷物だったEくんが副班長に！ なんとという成長ぶりだろう。それに続く彼の言葉に、わたしはびっくりして椅子から転げ落ちそうになった。

「このごろは、休み時間に、みんなの人生相談を聞いてあげているんです」

思わず噴きだしそうになった。もう大丈夫だ、彼は社会復帰できる、と確信した。

深く苦しんだ人ほど、他人の苦しみを理解できる。だから彼は、人生相談のよき聞き手になることができたのだろう。過去は変えられない。けれども、いまをどう生きるかで、人は過去にあったことの意味を変えることができる。つまり「過去は変えられる」のだ。

そのとき、教室がゆっくりと揺れだした。乾井教官が「めまいがする」とつぶやいた。

「先生、めまいじゃありません。揺れてますよ」

窓の外に目をやると、運動場の端に植えられたボブラ並木の梢^{すえ}が揺れていた。大きく大きく、まるで水草のようにゆっくりと。東日本大震災だった。

受刑者たちも、やがて、刑務所内のテレビで地震の被害を知ることになった。繰り返し流される津波の映像を、彼らはどんな気持ちで見たのか。

地震の数週間後、教室で彼らに会うと、みな一様にショックを受けていた。

「刑務所において、なにもしてあげられないのがもどかしい」

「被災者はたいへんな暮らしをしているのに、ぼくらは三度三度ご飯を食べさせてもらっていて、申し訳ない」

そんなことを口々に話してくれた。「犯罪者は刑務所でのうのうと過ごしている」と世間には思われがちだが、そんなことはない。彼らなりに、大災害の犠牲者や被災者に思いを馳せ、心を痛めていたのだ。そんな彼らを見ると「モンスター」なんかじゃないと、つくづく感じるのだった。

すきな色

ぼくのすきな色は

青色です

つぎにすきな色は

赤色です

「好きな色を」と言ったら、Fくんが書いてきた単刀直入な詩だ。いくらなんでもここまでの剛速球を投げてくるとは、想定外だった。一体、どこを誉めればいいのか、わからない。教官もわたしたちも、頭を抱えた。

すると、受講生たちがさっと手を挙げたのだ。こんな作品に、一体なにを言うことがあるのだろう、と不思議に思いながら当てた。

「ぼくは、Fくんの好きな色を、一つだけじゃなくて、二つ聞けてよかったです」

息を飲んだ。思いやりに満ちた、こんなやさしい言葉があるだろうか。指導者側は、だれ一人思いつかなかった。もう一人を指すと「ぼくもです」と言う。

「ぼくもって？」

「Fくんの好きな色を、二つも教えてもらって、うれしかったです」

パージョン・アップしている。熱いものがこみあげてきた。

この詩を書いたのは、「土の塊くん」。ドサツと、そこに「いる」というより「ある」だけ。目は宙を泳ぎ、だれの言葉も彼の耳に届いているように思えない。Fくんは、自分だけの透明なカプセルに閉じこもって、妄想の世界に遊んでいるように見えた。

そんなFくんに対して、受講生たちは、こんなにもやさしい言葉をかけてくれた。指導者側がだれ一人思い浮かばなかったやさしい言葉だ。また一人、手を挙げた。これ以上、一体なにを言うことがあるのだろう、といぶかしく思いながら指すと、彼は、心を込めてこう言ってくれた。

「ぼくは、Fくんは、青と赤が、ほんまに好きなんなやなあ、と思いました」

完敗だ。こんなにもつすぐな言葉、逆立ちしても思いつけない。

当のFくんは、どうしているだろうか、ふと目をやると、なんと、笑ったのだ。口の端がゆつくりとあがって、ふうつと微笑んだ。花がほころびるように微笑む、とはこのことか、と思うような、やわらかな笑顔だった。うれしくて、泣きそうになった。

教官も同じ思いだった。「おい、Fくん、いい顔してるなあ」と、乾井教官が、目を潤ませながら声をかけた。すると、Fくんは、はにかむような表情を浮かべ、頬をぽつと赤く染めた。かわいかった。たまたまなくかわいかった。

彼はもう「土の塊くん」じゃなかった。自ら透明なカプセルを破って、この世界に飛びだしてきたのだ。この日から、Fくんはみんなと会話ができるようになった。

えっ、これだけのことなの？ とわたしは思った。たったこれだけのこと？ 人はそれで、一瞬にしてこんなにも変われるの？ 自分の気持ちを表現すること。それをだれかに受けとめてもらうこと。人はそれだけでここまで癒やされ、人とつながれるのか。

だとしたら、Fくんは、いままでもどんな世界に住んでいたのだろう。一人用のカプセルに閉じこもって外界を遮断しなければならぬほど、過酷な世界に住んでいたのだろうか。きつと、たったこれだけの言葉さえかけてもらえない荒涼とした場所にいたのだろう。それを思うと、そのさみしさ、過酷さに、身震いする。外界を遮断する透明なカプセルは、自分を守るための「シエルター」心こころの「鎧」だったに違いない。その強固な鎧を、教室の仲間たちのやさしさが融とかしてくれた。「剥むき出しの心で外に出ても大丈夫だよ。ぼくたち、きみの仲間だよ」とFくんに伝えてくれたのだ。わたしたち指導者が、だれ一人としてできなかったことを、教室のみんながしてくれた。指導者の手柄ではなく、受講生たちによる「場の力・座の力」だと思った。

このことは、わたしにもう一つ、根本的なことを教えてくれた。それは、だれかが「これは詩だ」と思っ
て書いた言葉があり、それを「これは詩だな」と受けとめる人がいたら、その瞬間、どんな言葉でも「詩になる」ということだ。そして、それは書いた人の人生を変えるほどの力を持つことがあるのだ。

すぐれた詩作品があり、そんな詩にこそ価値があると思っていたわたしは、愚かな「詩のエリート主義者」だった。もちろん、世の中には、すぐれた詩作品がある。時を超え、国を超えて読み継がれる素晴らしい詩もある。でも、それにしか価値がないわけではない。

言葉の本来の目的は、人と人をつなげることだ。言葉を介して、互いに理解しあい、心を受けとめあうことだ。どんなに稚拙なものでも、そのとき、その言葉が、その場にいる人々の心に届き、響きあうのであれば、言葉としての役割を十分に果たしていることになる。それこそが、言葉のいちばん重要な使命であり、大切なことなのだ。たとえその言葉に、普遍性のかけらもなかったとしても、少しも構わないのだ。だって、その言葉は、すでにこの地上で人と人をつなぎ、喜びを生みだしているのだから。言葉として、それほど誇らしいことがあるだろうか。

彼らは、たくさんの大切なことを、わたしに教えてくれた。彼らが変わっていくように、わたし自身も変わっていった。

いまのわたしが、こんなわたしなのは、彼らのお陰だ。わたしは、重い罪を犯した受刑者たちに、育ててもらった。ありがとう。固く閉ざされた心の扉が開かれたら、あふれでてきたのはやさしさだった。生まれつきの悪者やサイコパスなんていないと、信じられるようになった。人間ってきつと、本来「いい生き物」なんだ。そう思わせてくれて、ほんとうにありがとう。

〔出典〕 寮美千子『あふれでたのは やさしさだった』

なお、作問の都合上、原文の一部を改変した。

〔注一〕 水が自然にしみこむように、少しずつ養い育てること。

〔注二〕 異常で冷酷な行動を平気とする人。

〔設問〕

筆者は文章の中で「彼らは、たくさんの大切なことを、わたしに教えてくれた。」と述べている。この文章を読んで、あなたが思った「大切なこと」は何ですか。二つ以上取り上げ、そう思った理由とともに述べなさい。また、それらの「大切なこと」を、どのように生かしていくことができるか、あなたの考えを述べなさい。

〔以下 余白〕

折り線

表

注意

1. 解答用紙は折り線のところまで折ってから解答すること。
2. 解答は縦書きとし、楷書で上から下へ書くこと。

裏へ

300

表から続き

表

折り線

注意

1. 解答用紙は折り線のところで折ってから解答すること。
2. 解答は縦書きとし、楷書で上から下へ書くこと。

1200 -

900